UCLA
Collection of Creative Writing by Learners of Japanese

Title
The Collection of Creative Writing By Learners of Japanese □□□□□□

Permalink
https://escholarship.org/uc/item/7sf276dj

Publication Date
2019-12-01

Peer reviewed

eScholarship.org Powered by the California Digital Library
University of California

The Collection of Creative Writing By Learners of Japanese

リレー小説集
(Collection of Relay Essays)

Volume One

Edited by *Asako Hayashi Takakura*

The Collection of Creative Writing By Learners of Japanese

リレー小説集
(Collection of Relay Essays)

Volume One

リレー小説集 is written by the students of Japanese 100R (Third year advanced readings in modern Japanese, fall 2018) and Japanese 101C (Fourth year advanced readings in modern Japanese, spring 2019). This volume was compiled and edited by Asako Hayashi Takakura, the lecturer for these classes, and published by UCLA Library.

Cover photo "Tokyo Tower from the Sky" by Yukiko Ushimaru, Copyright 2018. Used with permission.

First published December 2019

This volume is licensed under Creative Commons Attribution-ShareAlike 4.0 International.
CC-BY-SA 4.0

Typeset in Palatino Linotype for English
in Hiragino Kaku Gothic for Japanese

The Collection of Creative Writing by Learners of Japanese is a series of selected works of short prose and poetry written by the students of Japanese language in the Department of Asian Languages & Cultures of the University of California, Los Angeles. The collection is curated by Richard C. Rudolph East Asian Library to promote students' knowledge production in the Japanese language.

Preface

This project aims to promote creative writing skills among Japanese language learners and provide them with opportunities to publish their work to benefit future learners. The project targets undergraduate students in their third and fourth years of Japanese language studies, taking courses designed to develop their reading skills to allow them to read a novel without external support. To this end, students were encouraged to participate in significant reading activities outside class. However, students indicated that they could not find attractive and appropriate reading options among the extensive Japanese reading collections. This project seeks to address the gap by encouraging students to create their own fictional works. Working in groups of three or four, students wrote a fictional work together. The students in the third-year Japanese class read *Spirited Away* and watched the original anime as course assignments. Their creative writing was inspired by the story and used various words that are not found in commercial Japanese language textbooks. Fourth-year students wrote a story relating to the main theme of the course: *Tokyo*. They successfully differentiated writing styles and applied these to their creative writing. Upon completing these assignments, students were motivated to publish their own work for future students of the Japanese language, expressing hope that their works might encourage others to write in various genres to improve their language proficiency.

Asako Hayashi Takakura, Ed. D

Table of Contents

Title	Author	Page
天国への旅	Leona Wang, Yifei Wang, Teresa Zhou	5
希望は星にある	Erica Jeon, Taylor Fallis, Jimmy Hernandez	17
魂の世界	Wenxin Li, Yunke Zhan, Man Zhu	43
未来から来た少年	Alex Tsai, Xiaoqing Liang , Ling Cui	48
東京四季物語	Lisa Guiotoko , Irene Nakano, Minami Sasaki, Yechan Lee	54
東京ホラーワールド	Lisa Steward, Shengyu Xie, Yuko Usui, Yuri Sakakibara	61
あるファンの小さな物語	Yinuo Huang, Michelle Liu, Suyuan Liu, Kaya Wong	68
謎に包まれた愛	Jiayue Zhu, Xi Chen, Huaqing Xia, Zirui Liu	71

天国への旅

レオナ・ワン
イーフェー・ワン
テレサ・ジョ

Leona (Zhaoyu) Wang
Yifei Wang
Teresa (Wenqin) Zhou

Illustration by Lisa Steward

This work maintains the format chosen by the authors.

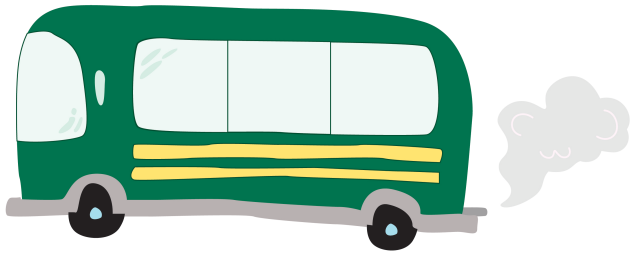
「あ、待って！」バスに手を振って、ナオミは叫んで走りました。

いつもナオミを何分も待っていて、次の駅に行かない運転手は今日、何も聞かないように前に行き続けました。何故でしょうか。ナオミは吐いて戸惑っていました。

「おじさん、今日休んだのかな。どうして私を待っていないの。これで学校に行けないよー」と呟きながら、涙が出そうになりました。

家から駅まで、一時間かかりました。そして、今日のバスはさっきのバスだけでした。携帯も買えないナオミは絶望して頭を抱えて、ベンチに座りました。

「ゴンーゴンー」ナオミの涙が溢れる前に、バスの音が聞こえました。駅へ来るのは、２号のバスではないでしょうか。いつもの青色のバスではありませんが、確かにスクリーンに「２」と書いてありました。ナオミは急に立って、バスに手を振りました。



「あなた、このバス乗りたいの？」運転手は振り向いて、表情のない顔で問いました。

「うん、お願いします！」ナオミは訳もわからずバスに乗りました。運転者は呆然とナオミを見つめて、首を傾げました。

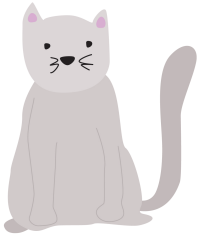
「ニャー、ニャー」

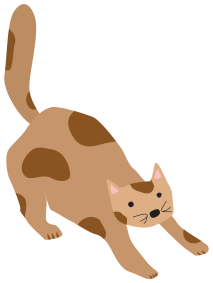
どこからか子猫の声が聞きつけました。

「えっ、猫がいるの。近いところから見たいな。」ナオミは見回して猫を見つけ始めました。「猫ちゃん、こっち来い。」席から立って小さな声を出しました。

「うわー、かわいいじゃん！」後ろの席の上に子猫が三匹いました。「私、猫好きだから、うちに来る？ばーちゃんは美味しい食べ物をあげるよ。」ナオミは嬉しくて猫と話し始めました。

「ニャー、ニャー」子猫たちも返事みたいな声でナオミに叫びました。





「次は終点でございます。降りてください。」突然、バスのアナウンスが鳴りました。びっくりされたナオミはやっとバスが止まったのを発見しました。戸惑ったが、ナオミは子猫たちを抱いてバスから降りました。

空は七色で、地面は雲のように柔らかく、目の前に長い行列ができていました。遠くにあった改札で、遊園地の改札員のような人が審査しながら、人々を柵の中に入れました。ナオミもほかの人のように並んでいました。

いい子じゃん。バッグに入って、学校に行くから隠さなきゃ先生に怒られてヤバイから。」ナオミも子猫たちと話し続けました。

「えっ、なんでヌルヌルするの。」ナオミが眉を顰めて心配して子猫たちに聞きました。今度は返事がありません。

「まあ、しょうがない、こっちに来て。」ジャケットをぬいでタオルのように使って拭き取ってかわかしてあげました。

長い間待って、やっと改札に着きました。

「あなたの名前は？」改札員は頭も上げずに聞きました。

「ナ、ナオミです。」ナオミは急いで返事しました。

改札員は冊子の中で繰り返し探して、眉をひそめて頭を上げて「間違いないでしょう、ここにナオミがいない」と言いました。

「どこにいないんですか？」

「天国のリストだ」

その返事を聞くと、ナオミは目を丸くし、言葉が出ませんでした。行列の人たちはみんな死んでしまった！

どうしたらいいかわからない時、知っている声がしました。

「ナオミさん、どうしてここにいた？」

呼ばれて、振り向くと、普段の運転手でした。

「ここへきてはいけない！すぐ戻れ！」運転手は叫び続けて、ナオミに向かって走ってきました。

「え？」

まだ反応していないナオミは、ぼんやりと走ってきた運転手を見て、押し付けられました。

「あ！」はっと目が覚めて、床から起き上がりました。

「夢だったのか？」ナオミは呟きました。

しかし、後ろのバッグの上に濡れているジャケットがあるのに気づかなかったのです。

希望は星にある

Erica (Hyein)Jeon (エリカ・ジオン)
Taylor Fallis (テイラー・ファリス)
Jimmy Hernandez (ジミ・ハーナンデス)

Illustration by Andrew Frastaci

This work maintains the format chosen by the authors.

人間のせいで地球に住んでいるのが危なくなりました。

お金持ちは宇宙船を作って宇宙の安全な町に行きました。

しかしお金がない人は地球に残ってしまいました。

空に飛び回っている宇宙船を見て少年がお母さん

に尋ねました。

「お母さん、この宇宙船はどこに行くの。
私も乗れるかな。」

「星くん！宇宙船を見なさい！どこへも行かないよ！心がない人だけ宇宙に行く。」怒ったお母さんはそう言って静かに泣き出しました。

「この人は私たちを捨てた。」

空を見続ける星くんはお母さんの泣き声を聞かないでつぶやきました。

「どうして。宇宙に行きたい。将来行くよう！」

何年も経って星くんはお母さんの悲しさをわかりました。

今十八歳の星くんは重体のお母さんのために薬を探して子

供の時の宇宙の夢を忘れました。

しかしどこに行っても、同じ返事を聞きました。

「ごめんなさい星さん。この地球にその薬がない。

宇宙船に乗る人が全て薬を持っていったんだ。探

すのは無理だよ。」

星くんが家に帰り出す前に不思議な男の人が

変な声で問い掛けました。

「お母さんはもうすぐ死ぬよ。でもこの薬がどこにあるか知っている。しゃべってほしい？」ニヤニヤしました。

「うるさい！うそだー」

「ニヤニヤ！うそじゃない。今年は宇宙船競走がある。宇宙船があるけどレーサーがいない。レーサーみたいだからやりませんか。勝者が何でもしたいものをもらう。」

「えー！本当ですか。でも聞いたことがない。」

「ニヤニヤニヤ。もちろん、違法だから。」

星は知らない人の提案を考えて、間もなく、お母さんを助けるために薬を買う一番いい機会なので、受け入れました。

「はい、母を助けるために、レースに参加しに行きます。でも、どうやってレースのお金を払いますか。

そしていつ、どこでレースがありますか。」

「大丈夫だ。心配しないで。今、家に引き返して、お母さんと話して。明日は、私達が行こう。」と知らない人が言いました。

「待って！すみませんが、名前は何ですか。」

「たくらだよ！」変な男は言いました。

星はとてもまごまごしましたが、これはチャンスです！知らない男によると、お母さんを助けられます。それで星は家に引き返し始めました。

「お母さん、ただいま！僕は話さなければいけないことがある。」

「うん？」

「知らない男に会って、宇宙船競争があって、勝ったら薬が買えるんだ！すばらしくてすごいよね。明日に僕は行くよ。でも、絶対帰ってくるから。」

次の日、星とたくらは宇宙に行きました。すると、二人は宇宙船競争をまじまじと見ます。

その上、たくさん星があるので、空で電気がチカチカしそうでした。まもなく星が宇宙船競争に登録しました。

「あっ！僕は宇宙船がないよ。どうしよう。」星は心配しました。

「心配しないよ。僕の宇宙船を貸してあげる。」

「本当ですか？ありがとうございます！」

たくらの宇宙船を借りて、レースを整ったが、お金持ちが星に対して、
悪口や嫌がらせを始めました。

「貧乏な子供、元の場所に帰りな。ここはおまえの所じゃない。どうして宇宙船競争に参加した？死にたいのか？それなら、今私達はおまえを殺せる。」

「すみません、お母さんが大変な病気なので、薬を買うために、お金が必要です。」怒った星は答えました。

「皆さん、いらっしゃいませ。
今年の宇宙船競争が始まります。
ありがとうございます！」

「これは！これは僕のチャンス！」
星は頑張ろうと思いました。

「バーンバーン！」

「絶対に母を助けて！約束して。」

おめでとう！
星くんが勝った！

勝った後で、星くんは早く家に帰って、
お母さんに知らせました。

しかし、戻った時、お母さんを見つけられませんでした。
テーブルの上にノートがおいてありました。

お母さんのノートに

「すみません　星君、実は私は病気のふりをしました。星君が勝ったら、私はこの死んでいる世界を逃げられると知っていました。その新しい宇宙船レースに勝ってよかったです。今ついにもう一度、宇宙に住んでいる夫に会いに行けます。お別れのお土産を楽しみなさい。馬鹿な息子！アッハハハ！」

と書いてありました。

星くんは外から人々が
家の中に来るのが聞こえました。

たくさんの警察官です。

「誰か家にいますか」と呼びました。

「一人を見つけた！」

「動くな。あなたの両手を見せなさい！」

警察官は私を外に引っぱり出して、
僕は冷たい地面に落ちました。
誰かが私の上にいました。

「あなたが違法のレースに参加したから、僕達はあなたを殺さなくてはいけない。
すでにあなたの友達を見つけて殺した。たくらと呼ばれたね。彼は赤ちゃんのように泣いていた。」

「おい！早くしろ！誰かが僕達に気づく前に！」「はい、はい」

即座に、星君の体が痛くなり始めました。
星君は意識を失い始めました。
死ぬまぎわに、遠くに宇宙船が宇宙に行くのを見ました。

「お母さん。。。なぜ。。。」

魂の世界

Wenxin Li
Yunke Zhang
Man Zhu

浅香葉子はB高校の三年生です。ある日、葉子はいつものように朝六時半に起きて、高校制服を着て、朝の新聞を見て、朝ごはんを食べます。そして、美咲と一緒に学校に行きます。いつもと同じような馬鹿話をして、時を過ごします。家から学校まで、たぶん十五分くらいかかります。皆さんはいつも「おはよう！」と言って、顔と顔を見合わせます。授業の時、「葉子はいつも無精だねえ、しょうがないな。」先生は頭を振ります。学校の時間はすごくつまらないけど、でも一日の時は速く過ぎ去ります。葉子はとても疲れて、眠いから、ちょっと元気がありません。

「葉子ちゃん、一緒に帰ろう、話したいことがあるよ。」美咲が言いました。「いいよ、何？」葉子はちょっと不安を感じます。「実は、ごめん、私と翔太君は、恋人になった」この話を聞いて、葉子はすごくびっくりしました。美咲は葉子の大切な友達ですが、翔太は葉子の好きな男の子です。いつも美咲と翔太について話しています。「そんなばかばかしい！」葉子心の中で考えました。何と言ったらいいかさっぱりわかりません。「うん、お幸せに。」葉子は体の向きを変えると，他の道の方へ歩いて行きました。車がひっきりなしに通ります。この時、葉子は道を渡る時に、車にぶつかったのです。

昏睡して、どれくらい時間が経ったか分かりませんが、葉子はついにだんだんと意識がはっきりとしてきました。彼女の視野は、だんだんとぼやけた状態から、くっきりとしてきました。でも頭はまだ痛いです。「何があった？私はいまどこにいる」そう思って、葉子はゆっくりと座った時、体が軽い感じがしました。突然、彼女は部屋の隅に黒いジャケットを着た男を見て、びっくりしました。

「あなたは誰ですか。」

「怖がらないで、あなたはまだ死んでいない。私はあなたを助けるためにここにいる。」

「え？死んで．．．？どういう意味？」

「後を見て。」男は葉子の後ろを指します。

葉子はゆっくりと頭を回します。「きゃあー！」葉子は寝ている自分を見て、大声で叫びます。

「事故があった時、あなたの魂がばらばらになった。ここはただ君の半分の魂がある。もしあなたは3日で魂のもう一つの部分を見つけることができないなら、その時、あなたは本当に死ぬでしょう。」これを言った後、男はこの部屋からはなれて行きます。

どうすればいい。事故現場に戻れば、何かを見つけるかもしれません。そう思って、葉子はベッドから起き上がり、外に出かけます。ちょうどドアを開けた時、葉子は美咲を見ました。

「美咲！」葉子は美咲に挨拶しますが、美咲が葉子が見えなかったのでベッドにまっすぐに行きました。「うそ！私が見えないの。」葉子はそのことを知って怖くなりました。

美咲は葉子のベッドサイドに行って、隣の空いているベッドに座りました、寝ているような葉子に「ごめんなさい、葉子、私のせいだ、やっぱり、翔太の言う通り、この事を言わない方がよかった、でも、しかたないさ、私は本当に辛い、葉子に言わないで、翔太と付き合って何で…でも翔太が私に告白したから、私は…」話す間に、美咲はぺこりと頭を下げて、しくしく泣き始めました。

そして、ゆっくりと意識も失くしました。目を覚ます時、周囲は非常に暗くなりました、

そして、葉子は彼女の側に立って，彼女を見て、ぎくっとしました。「怖がらないで、本当の葉子だよ」そして、葉子は自分に会ったあと、美咲に言いました。

じや、まず、一緒に魂を探しましょう、もう時間がないんだ。」 美咲はそう言いました。

美咲は葉子の出会いを聞いて、何かがわかるかもしれないと思って、直接翔太が住んだ場所に行きました。「美咲、どこに行くのか知っている？」外の世界も黒いし、町の中にたくさん美咲と葉子みたいな、足もない魂が走り回っています。
「うん！翔太の場所に」

「ええ、どうして」
「何も言わないで、会ったらわかるよ」
「え？この姿で？無理よ！」
「いいから、ほら、ここだよ」
「これは？」

翔太が住んでいるアパートは、もう黒いヘドロでいっぱいです。

「怖える時間はない、いくよ」

美咲と葉子はアパートの中に入って、すくに全身黒いヘドロのような魂に会って、攻撃が始まった瞬間、前にくろい影が現れて、攻撃した魂が消えました. あの黒ジャケットの男です！

「時間がないよ」 黒ジャケットの男が言いました。

翔太が出てきました！頭の下は全部　ヘドロのような巨大な怪物になりました。

「翔太君! 」 葉子の声です。

　翔太は気が付きました。そして、怪物みたいに、巨大な拳が来ました！　その瞬間、黒ジャケットの男が飛び込んで、翔太の頭を刺して、翔太は悲惨な叫び声を立て、消えてしまいました。体の中から二つ輝く透明な魂が出ました。

　朝、太陽がもう上がって、葉子はやっとベッドに起き上がりました。隣の美咲も目覚めました。二人は互いを見て笑いました。

未来から来た少年

Alex Tsai
Xiaoqing Liang
Ling Cui

真夜中にとぼとぼ歩いて帰りながら、空の三日月は笑っているように地面を見ている。

セミが鳴いてる街には、このだらしなくたるんでいる女会社員以外、誰もいない。突然に、真っ暗な雲は月を隠して、ひどい雨を呼び寄せた。でも、あの女は全然気にせずにゆっくり歩き続けた。あの女にとって、濡れて重くなる服はただ肩の上に重ねている重荷の一つばかりだ。アパートに到着した時に、彼女は下着まで全部を脱いで部屋の奥に投げた。自分の残っている力を使い切って布団の上に倒れた。天井をじっと見ていて、雨が騒々しくざーざー降っている。

「今日も…　最悪だわ。」残業を二ヶ月間連続して、全くやる気がなくから、冷蔵庫のビールしか飲みたくなく、今日の早乙女望夢も一人で泣けないほどに苦しんでいる。心の煩悩を捨てて、視野が暗くなり、雨のうるささが無くなり、望夢は徐々に眠り込んでしまった。

その瞬間、全ては明るくなった。なぜか分からない理由で不思議な場所に目覚めて綺麗な服を着ていて、さっぱりして元気が満ちる。寝込んだばかりなのに、体力が一杯だ。

「…えっ？」彼女は一体どこにいるか。

この真っ白の向こう側に男の子が膝を抱きかかえて座っている。内気に、なんか怖がっていて、その男の子が言った「す、　すみません。お姉さんはどなたでしょうか？」

驚きたくないように、望夢は慎重に近づいた「のぞみですよ。のんちゃんって呼んでもいいよ。」

少年の前に横座りし、小さい声で聞いた、「ここはどこ？」その子は首を横に振った。

「じゃ、お名前は？」もう一回横に。

望夢はちょっと困っているが、「安心してね。友達になりましょうよ」

少年は怖がりすぎて、何も話さなかった。

「覚だ」、「僕の名前は覚だ。」　「友達がいない。この部屋を出られない。」

「なぜ？ご両親はどこ？子供は外で遊ぶべきだよ」

望夢は話しながら、きょろきょろ見回した。

この部屋は物が少なかった。ベッドが一つ、机が一つ、椅子が一つあった。窓があったけど、子供にとって高すぎた。望夢は机の上に踏み上がって、窓から外を見た。

「母は僕がお荷物だと言う。僕がいなかったら、母はもっと明るい未来ができた。色んな仕事に勤めて、他のおじさんとデートして、外国にいって。」

「僕を閉じこめて、めったに外に連れて行かない。」

外で建物の時代を比較すると、あまりに違かった。何もかも白くて、工場のような世界だ。

「今日は何月何日なの？」望夢は聞いた。

覚は首を横に振った。

覚の寂しそうな生活を見ると、望夢は自分の子供時代の苦しみが浮かんた。子供の時、望夢は学校に行く代わりに、家でお母さんに教えられた。いつも一人でいて、友達は金魚しかいなかった。しかし、ある日、金魚は水から飛び上がって、地面に落ちて、死んでしまった。多分、金魚は望夢と親のようにじめじめした生活をしたくないからかなあ。でも、望夢は家を離れて、自分なりに幸せを見つけられるのを信じた。ついに一人暮らしがてきたが、生活は思ったのと全然違っていた。

「今は私はあなたの友達だ！一番の友達だ！一緒に外で遊びに行かない？」

覚は窓を見上げて、何も話さなかった。

望夢は覚を助けて窓から外に逃げた。そして、自分で外に出た。この世界は望夢と覚にとって、新しい世界だった。望夢は「2030年10月20日」と書いている看板を見ると、未来にいているのがわかった。彼達は公園や本屋や色んな無料のところに行った。仲良しになった。　望夢は仕事を全く忘れて、覚も自分のこまっている生活をわすれてしまった。

彼らが遊んでいる間に、望夢は、突然頭の中で時計の音を聞いた。彼女は多分自分の現実に戻る時間になってしまった。時間がないので、望夢は覚に、「私が私の世界に戻らなければいけない時間みたいだ、覚に出逢えてよかった。また会おうね！」最後の言葉が終わらないうちに、急に望夢は覚の前から風雲のように風の中に消えてしまった。覚も一人になった。

望夢が去った後に、覚はとても悲しくなった。彼は、これは夢かもしれないと思う。しかし、覚はこれは真実だと信じて、自分に言った。「望夢が戻って来ると言ったら、彼女はそうするだろう！友達だと言ったので、信じるべきだ！うん、きっとそうだった。」

望夢は目を開けて、いつものように部屋を見回した。「なんという夢だろう、私はほぼ一年間眠っている感じ！やばい、頭が痛い！」望夢は起きて、服を着た。鏡の前に立って、「今日も悪い日だ、嫌がらせだ。」彼女はこういうと、まだ、一人で笑って、幸せなふりをして、仕事に行った。この時代は、人々は本当にあなたをどう思うか、どのような感じがあるかを気にしない傾向がある。だから、何も話さないで、幸せなふりをして、生活できるんだ。

通りを歩いている望夢は、何か忘れたような気がしていた。一週間くらい、いつも同じ夢を見て、誰かが望夢に話しかけた。「早く帰るよ、約束だぞ、僕はここで待ってるよ！」

望夢は目覚めた、自分に「あれは誰？」と言った。何も考えずに、仕事に行った。

彼女は昨夜はよく眠れなかったので、昼休みの間に、仕事場で早く眠ってしまった。目を開けて、再び、白い部屋にいる。覚はじっと望夢を見て、話し始める。

「望ちゃん、あなたが来た！僕は何日もあなたを待っていた、あなたが帰ってこないと思った！」望夢はここにもう一度いるので、全部覚えている。なるほど前のは夢じゃない！望夢は覚に「覚のことを絶対忘れない、友達だから。じゃあ、遊びましょう！」と言った、覚は「いいんじゃない？母は帰った、どこにもいけない」と悲しげに言った。

望夢は好奇心があるので、いつも覚の母に会いたかった。そして、覚に「大丈夫！覚は先に逃げて、私を後で探しに来て」と言った。覚はしばらく考えた後に同意した。

それから、彼は外に逃げた。好奇心のために、望夢は壁の陰に隠れて見ていた。突然、彼女はショックを受けた！「あ..あそこにいるのは私じゃないの？信じられない！一体何だろう」びっくりしたので、すぐ外に走った。望夢はすごく考えて、彼女は多分覚の母かもしれない！覚が話したことを覚えていて、自分が悪い母みたいだ！運命で彼女をここに連れて来た。二度目のチャンスを与えたのか？

望夢は「覚、いい子、もう大丈夫でしょう！じゃ、遊びましょう！」と言った。望夢が話すことを理解せずに、覚と一緒の誰かがいる限り、彼は幸せでした。遊んでいる間に、望夢は誰かが起こす声を聞いた。「望夢、望夢、起きて」、現実に戻る時間になった。望夢は覚の前に走り出して、抱きしめた。「覚、私が戻る時間だ、これから心配しないで、また会えるよ！」望夢は自分の時代に帰った。

数年後、望夢は妊娠し、男の子を産んだ、覚という名前をつけた。覚が生まれた時から、なるべく良い母になろうとした。望夢は覚の父と離婚したが、彼女は覚に家を感じさせるために最善を尽くした。

そして、2人は一緒に幸せに暮らした。

東京四季物語

Lisa Guiotoko
Irene Nakano
Minami Sasaki
Yechan Lee

冬

人混みを通り抜けてやっとのことで駅の外に出られたミドリは、無意識にため息をついた。寒さで白く曇った息を見て、寂しさがこみ上げてきた。たった半年前までは物珍しくてキラキラして見えたこの街も、今では窮屈に感じて居心地が悪い。東京での生活があんなに楽しみだったのにと思いながら、ミドリは残業続きで疲れた体を運んで家へ向かった。

道の向こう側から、楽しそうな笑い声が聞こえた。顔を上げると、女子高生の４人組が歩いているのが見えて、ミドリはふと学生時代の友達のことを思い出した。あんなに仲が良かったのに、別々の大学に通うようになって今では連絡もあまり取らなくなってしまった。楽しかった修学旅行の思い出はキラキラしたまま頭の奥にしまってある。一緒に見た景色、一緒に撮った写真、一緒に食べたたくさんの料理。その中でも一番美味しいと思った、旅館で食べた茶碗蒸しのことを思い出した。「あ〜私、疲れてるなぁ」と思いながらも、どうしても茶碗蒸しが食べたくなったミドリは、「たまには外食もいいよね」と自分に言い聞かせて、和食屋に足を運んだ。

お店の中に入ると、ミドリはとりあえず入り口の近くのカウンター席に座った。優しそうなマスターがオーダーを取ってくれた後、ミドリは少し落ち着かないまま店の中を見回した。

少し離れた席に座っていた女性と目があって、思わずあっと声を出した。そこにいたのは学生時代の友達のアオイだった。彼女も社会人になって、東京で仕事をしていたのだった。

「え〜！久しぶり！」「偶然だね！」と声を交わして、二人は目を丸くしてお互いの方へ小走りで近づいた。
「実はさ、高校の時の修学旅行のこと考えてたら急に茶碗蒸しが食べたくなっちゃって」とミドリが言うと、
「わ〜懐かしいね」

とアオイは笑った。それから時間を忘れて二人は他愛もない話をずっとしていた。長い間会っていなかったことが嘘のように、二人は笑い合い、会話が途切れることはなかった。

店を出ると、外はもう真っ暗になっていた。寒かった日常が少しだけ暖かくなったようだった。「よし、明日も頑張ろう」と自分に言い聞かせて、ミドリは歩き始めた。

夏

東京の真っ暗な夜。寒くも、涼しくもない、暑い夏の夜、一人で歩き続いている男がいた。「どうしてこんなになっちゃったの」と男は一人で考えた。

この不幸そうな男の名は健太郎。彼は３年前、働く為上京したが、今は無業で引きこもり生活を送っている。食事はコンビニのカップ麺やおにぎりなど加工食品で解決、生活用品はネットで、その他の時間はネットゲームをした。昼に起きて、朝までコンピューターの前でずっとずっと。健太郎はその日常を何ヶ月も繰り返していた。しかし、その幸せそうな人生にも終わりはあった。

今年の、最高気温の日、健太郎のACは壊れてしまった。扇風機だけでは我慢できない日にも彼はログインした。汗をかきながら何時間も熱を出しているコンピューターのそばから離れなかった。数時間後、ダンジョンの最後まで届いて、魔王を倒し、宝箱を開けているこの瞬間健太郎は強制ログアウトされた。

ハイスペックゲームをACもない、ものすごく暑い日に長時間ゲームをしたので、コンピューターが過熱してしまった。

「アイス食べたい」一日の努力が無になって、悔しかったからか、それとも単純に暑かったからか、健太郎はアイスクリームを買いに家を出た、そんな試練が彼を待っていることも知らずに。

「すみません、もう売り切れです」これが５番目だった。健太郎が家を出てから２時間、彼は周りのコンビニやスーパーでアイスクリームを探したか、全部売り切れだった。彼は忘れていた、今日が今年の、最高気温だったことを。半径２kmの店のアイスはもう無くなっていた。東京の真っ暗な夏の夜に健太郎は一人で歩き続けた。「どうしてこんなになっちゃったの」と一人で考えていた時、向こうのお店に気がついた。賑やかそうな和食屋だった。

無意識に、健太郎は入って、カウンター席に座った。
「あの、すみません。もしかしてアイスありますか」
「アイスはないけど…あっ、ちょっと待ってください」
優しそうなマスターが答えてくれた。少し後、マスターはすごく赤いスイカを持ってきた。「はい、お待たせ」健太郎はすぐ一口食べた。それは、歯が痛いほど、とても甘くて、とても冷たいスイカだった。彼は思い出した、子供の時、毎夏田舎のばあちゃんちに行って、悩みや心配もなく、周りの子供たちと遊んだことを。ばあちゃんはいつも赤いスイカを買ってくれて、一緒に星を見ながら食べるのが、健太郎の一番の幸せだった。「ごちそうさま」健太郎はお店を出て空を見上げた。星一つもない、真っ暗な東京の空。「帰ろうか」健太郎は歩き続けた。

春

桜が咲き始めた春の事、新学期に向かって歩く学生達。ピカピカなスーツを身にまとい、ソワソワしている男性がいた。「新入社員かぁ。。。初出社かな」と春樹は思った。

名前に「春」が入っているのに、春が嫌いだ。自分の焦りが表れてしまう。疲れ果てた自分に追い打ちをかけるかの様に春は自分にプレッシャーをかけてしまう、と春樹は思った。

今年で大学三年生。適当に専攻を選び、適当に大学生活を過ごしてきた。周りの人達が就職等を決め始めている中、自分は何をやりたいのか全く分からない。下を向きながらトボトボと歩いていた春樹は突然立ち止まった。「良い匂いがする」と呟き、顔を上げた。たまには外食でもするか、と思いながら、お店に入った。

「いらっしゃいませ」

春樹は頭を下げ、適当に席に着いた。「すみません、何か春らしいメニューはありますか？」

「焼きタケノコなんていかがですか？」 「じゃ、それを」 「かしこまりました」

店内を見回した春樹は周りの客を羨ましそうに見た。「皆自分の人生をちゃんと考えて生きているのだろうなぁ。会社に行ったり、学校に通ったり、人生を満喫しているのだろう」

「おまたせしました」

タケノコのいい香りがした。まず、一口。シャキシャキ。春の味がする。となりに座っているおばさん達の声が聞こえてきた。

「ちょっと、あんた、うちの子なんてね、ユーチューバーになりたいとか言い出してね、ろくに勉強しないのよ！」

「まあ、うちの子なんて自分で会社を設立したいとか言って、就活しないのよ！」

タケノコを食べながら春樹は少し笑った。「そっか。実は皆迷ったまま前に進もうとしているのか。」食べ終えると、店を出た。

「自分にはまだ少し時間がある。皆も迷っている。これから何をしたいのかゆっくり考えるとしよう。」笑顔と元気を少し取り戻した春樹は一歩ずつ、歩きだした。

秋

午後一時、大学の授業が終わって待ちに待ったお昼の時間だ。

さて、今日は何を食べようか。駅前に新しく出来たというイタリアンのお店も気になるし、少し離れた通りに隠れ家的カフェもあるらしい。

しかし黄色く色づき始めたイチョウ並木を歩いていると秋の到来を感じずにはいられない。最近は肌寒くもなってきたしやっぱり和食かな、とサヤカは独り言を言った。

毎度毎度授業後のランチの場所に悩むが最終的にいつも同じ場所を選んでしまう。冒険心をもっと持つべきかと思いつつもサヤカはいつものように大学の最寄駅の近くにある和食屋さんへと向かった。

歩いて十分ほどでお店に着いた。こじんまりとした場所だが中々賑やかで、奥の席がサヤカの定位置だ。

そうそうやっぱりここが安心できるんだよねぇ、と思いつつ席に着いた。そして優し気な笑顔のマスターが持ってきてくれたメニューを眺めつつ、いつもの和食定食にすべき

か、それとも新規開拓すべきかと悩んだ。悩んだが、結局いつものセットをお願いした。

そもそも何故サヤカがここまで行動の一つ一つを変えるべきか悩んでいたかというと先日恋人から別れを切り出されたからだ。それも毎回同じ感じでつまらない、という理由でだ。未だに正直飽きるんだよね、という言葉が頭から離れない。

ぼうっと思い出しているといつの間にか料理が目の前に置かれていた。今はとりあえずご飯に集中しよう。

ここの和食定食は同じといっても季節ものを取り入れていて実に美味しい。今日は鮭の西京焼きがメインのようだ。味噌の風味とパリパリの皮が絶妙で、美味しい。いつもついてくる五穀ご飯とお味噌汁も欠かせない要素だ。おいしい。同じお店で毎回同じお味噌汁だ、でもとってもおいしい。

ああやっぱり代わり映えのしない毎日ではあるが幸せではある。

私もあいつのことは忘れよう。私がこのお味噌汁を好きなぐらい、私の事を好きでいてくれる人を次は見つけよう。そう思いつつお味噌汁を飲み干した。

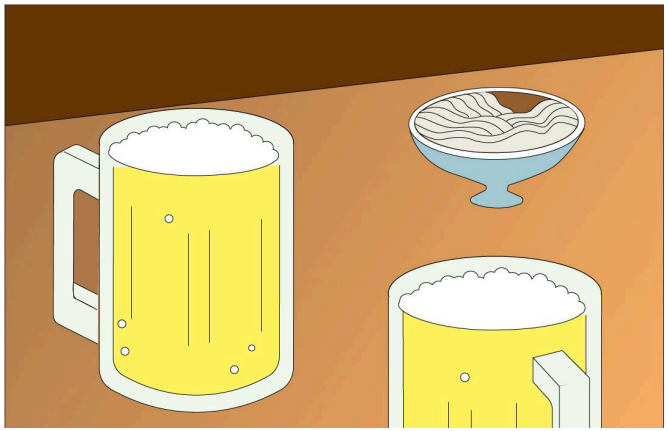
東京ホラーワールド

Lisa Steward (理沙　スチュワード)
Xie Shengyu (謝　晟宇)*
Usui Yuko (碓井裕子)*
Sakakibara Yuri (榊原有里)*
*Names appear in Japanese convention; the family name appears first.

Illustration by Lisa Steward and Yuri Sakakibara

２０２０年７月２０日、夜6時、東京都内、浅草橋駅の東口近くにある居酒屋の中で、「十也（トオヤ）

と呼ばれる日本人の青年は、「ジャック」と呼ばれるアメリカの黒人男性や「クイーン」と呼ばれるイギリスの女性や、「王（ワン）」と呼ばれる中国人男性、加えて「エース」と呼ばれるドイツ人男性と嬉しそうに酒を飲みながら話をしている。



五人はアメリカのミスカトニック大学で知り合って、あっという間に仲良くなった。今になってもよく五人でどこか面白い場所に遊びに行く。

今年は丁度日本でオリンピックが開催されるから、五人は東京に来て色々な試合を見に来た。

「オレ、今回のオリンピックが終わったら、国に帰って彼女と結婚するんだ。」

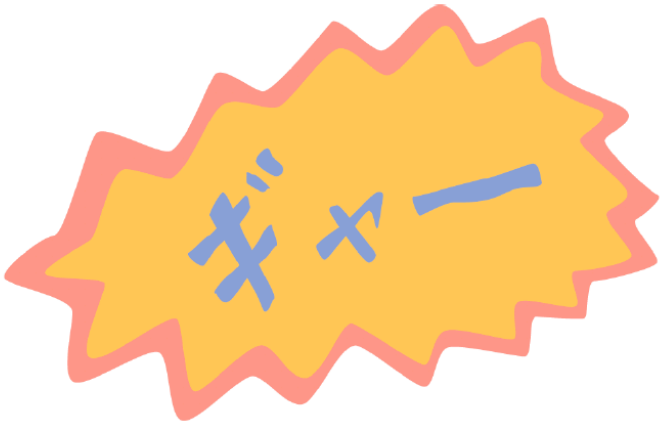
お酒を飲みすぎてちょっと酔っ払ったかもしれないが、エースは彼女からもらった大事なバットを見ながら幸せそうに呟いた。

その呟きを聞いたジャックとクイーンは祝福の言葉を贈ったが、なぜか十也と王だけ苦笑いしながらおめでとうと言った。

突然、まるで光そのものがこの場から完全に消えたように、店内に暗闇が訪れた。五人も含めて、店内にいる全員は停電だと思った。

だが、徐々に悲鳴が聞こえた。最初はただの「ギャーッ！」、そういう暗闇に飲み込まれたような悲鳴だけど、その次に「助けて！」とか「いやだ！わたしは死にたくない！」とか「ばっ、ばけものおぉー！」のような、決してこの場で聞こえる

はずのない悲鳴がどんどん五人の耳に流れ込んできた。



およそ十分後に、店内はようやく緊急電源に切り替えていたけど、肝心の照明はまだ故障しているようにチカチカと点滅してる。　そして、五人は気づいた。元々賑やかだった居酒屋が死者しかいない墓場になったように静かになった。

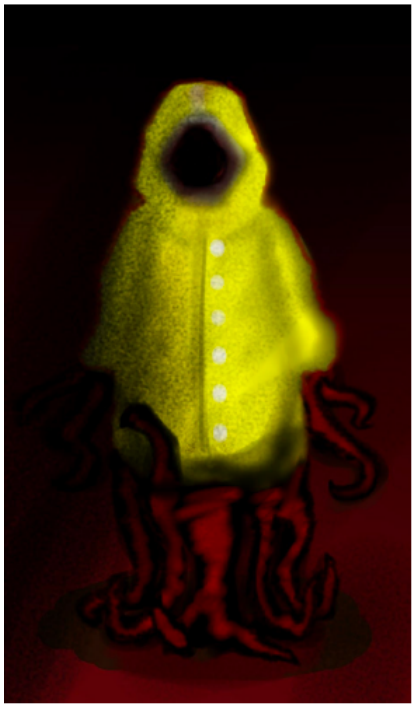
さっきまであそこでお酒を飲んでいたり愚痴を言ったりしていたお客さんが、全員いなくなった。そして、店内に残されたのは五人と、服やズボンの下にあったさっきまでお客さんだったグロい血肉だけ。

まるで人間が生きたまま何かによってひき肉に変えられたように血みどろな光景。これを見て、

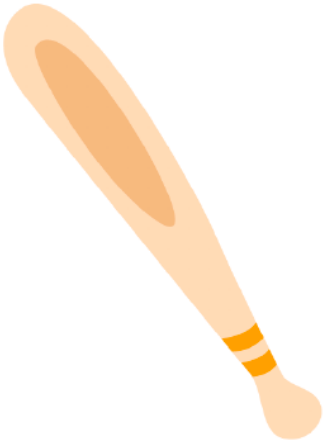
ジャックやクイーンそれとエースは思わず吐き出した。十也と王はギリギリまでその吐きたい気持ちを我慢した。五人に休みの時間を与えず、異変はまた起きてしまった。いつのまにか、五人の前に一人が立っていた。　黄色い雨ガッパを着ていて、少年のように見えるが少女にも見えるその体つき、妙に不気味に感じてしまう。顔はなぜかよく見えない……

いや、真っ暗のようにしか見えないんだ。四人は黄色い雨ガッパのことがこのように見えている。

エースの目に映った黄色い雨ガッパの姿、その顔はまるで漆黒な渦巻きのように回っていて、その渦巻きは数えきれないほどたくさんな小さな触手でできたもの。そして、黄色い雨ガッパを支えているのは足ではなく、エースの手より太い、タコ足のような数本の触手だった。



そんな名状しがたい「何か」を目撃したエースは、彼にとってお守りのような大事なバットを持ち上げ、雄叫びしながら黄色い雨ガッパに接近して、細胞の一つ一つから力を絞り込んだように全力でバットを振り下ろした。



だが、エースの全力の一撃は黄色い雨ガッパに命中していなかった……いや、命中する前に、太い触手で受け止めた。

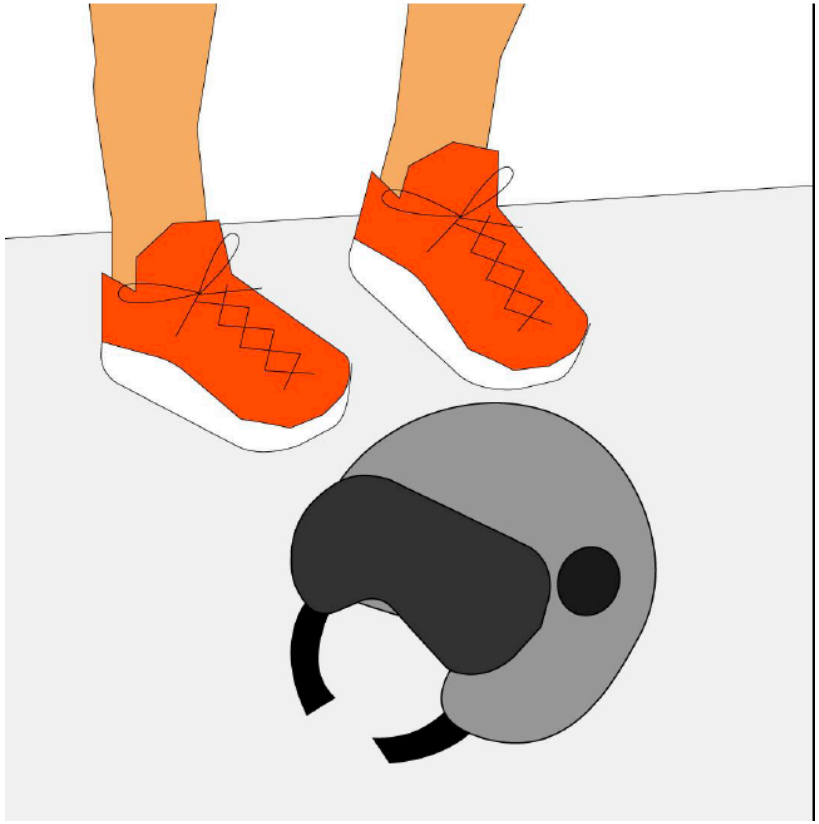
そして、黄色い雨ガッパは残りの触手を動かして、力強くエースを捕まえた。抵抗しようとしたエースだが、自分が今はむかっているのは本当のバケモノだと意識した瞬間、彼の意識はすでに恐怖心に飲み込まれてしまった。まるで手足はもう自分のものではなくなったように、彼は抵抗するのを諦めた。　バキッ！バキッ！バキバキッ！触手によってエースの手足は変な方向へ曲がってしまって、続けて彼の体がありえないほど後ろに曲がっていて、最後に彼の首がぐるっとひと回りした。　何が起きているか頭がそれを理解するのを拒絶してる四人は、一歩も動けなかった。只々目の前に置かれた「エース」だった「何か」を、嫌になるほど目に焼き付けられた。チカチカ、一瞬の暗闇と共に、黄色い雨ガッパは消えてしまった。だけど運よく残された四人はまだ恐怖心の支配から解放されていない。四人にできるのは、友人の死のために涙を流すしかない。

　ワンは泣いてもエースはもう戻ってこないと知り、涙を袖で拭き取って、「泣いてもしょうがない、私たちがここから今でなきゃなにが次にに起こるかわからない。どうにかここから出ないと。」言いながらワンはリーダーとしての役をとった。携帯をポケットから出し、その携帯の懐中電灯を使い、残っている四人は暗闇の中で出口を探し始めた。　「バラバラにならない様に手をつなごう。」　ワンが言った途端に少女が奇妙に笑っている声が店内のどっかから聞こえてきた。でも、ワンが懐中電灯を振り回しても、四人は誰も見えなかった。　「ふふふー。」

　ワンが懐中電灯を出口のドアに指してみると、ドアの真ん前に、またあの黄色い雨ガッパをきている少女が立っていた。　「ここからは、生きて出られん」

　すると、ある声が空間に響いた。　「時間です。」部屋の電気が消えて、四人の後ろのドアから光が照らされた。そこには従業員がドアを開けていた。　「VR体験の時間切れです。」　エースは立ち上がった。十也、ジャック、クイーン、王とエースはそれぞれ眼鏡付きのヘルメットを頭から外した。　「リアルだったねー。」

　「鳥肌が立ったよ。もう二度としたくないな。」「そうだね、これでいつもの生活に戻れるって少し楽しみだな。」　そう５人で話し合いながら、クイーンがふと呟いた。　「あれ、俺らってVR体験をしにきたんだったっけ？どうやってここに来れたの？今日は何年の何月何日？」



「俺も分からない。」　「僕も。」　エースが従業員に話しかけようとしても、５人組の方に振り向こうともしない模様。よく見れば、動きもしてなかった。

部屋全部がフリーズしてる状態のまま、５人はそわそわしはじめた。　トントン。椅子をトントン。壁をトントン。　「おーい、誰か！」５人の声を聞いてくれる人もいなく、彼らはいつの間にか真っ白な部屋で眠気に負け、もう二度と、目を覚ますことがなく、永遠の眠りに入った。

あるファンの小さな物語

Yinuo Huang
Michelle Liu
Suyuan Liu
Kaya Wong

中島花音は若い美しいキャリアウーマンであり、日本人気ファッション雑誌「Visee」の編集者をやっている。彼女はテーマや企画の立案、撮影のためのカメラマン・スタイリスト・ヘアメイク・モデルなどのスタッフィングから外部デザイナーへのデザイン発注、校正まできちんと完成できる。この日は「Visee」編集チーム結成一周年だ。普段編集の仕事はほとんど中島が完成したが、出版部長は中島のことは無視し、編集長の加藤にしか感謝しなかった。中島は苦笑いしかできなかったが、心の中には無数の白い目があった。加藤は本当に何もしなかった。編集長だから全ての功績を横取ったのだ。

しかし、仕事が終わったあとの中島は服を着替えて、全身黒の服を着て、姿を隠して、光速で空港に自分のアイドルに会いに行った。そうなの、中島が好きなアイドルは人気歌手の山崎裕人だ。山崎に関するものなら中島は何でもわかる。彼女は一瞬でキャリアウーマンから大ファンの姿に変われ、山崎の足元を追いつける。

ツイッターも全部山崎に関するものだけを検索する。家でも山崎のグッズを収集している。それは全部中島の大事な宝物だ。

ある日、中島は有名なデザイナーと待ち合わせるために出張に行った。待ち合わせ場所はそのデザイナー自身の店だった。その店で一足の靴が中島の目を捉えた。その靴は世界でただ一足しかないので、中島は自分が大好きなアイドル山崎のために買いたかった。しかし、ある人物のおかけで買えなかった。

中島はその靴の前に立ち止まって、迷っているうちに、ショッピングガイドからそのただ一足の靴が売り切れたというニュースが伝えられた。しかし、その靴を見た瞬間、中島はそれ以外に自分が大好きなアイドルに似合うプレゼントがないと確信し た。

彼女がショッピングガイドに頼み続けたとしても、ガイドは謝るしかできなかった。最後に中島はその靴を買うことを断念した。

「誰がその靴を買えたのかを教えてください！」と、中島はそう頼んだ。ショッピングガイドは彼女がついに諦めたのを知って、ほっとした。　そして、「Visseの加藤さんが買ったよ」と答えながら、店の向こうに座っている男の方をさした。

　それを聞くと、中島がむっとした。加藤さんが職場で抜け駆けしたことをギリギリ我慢できるが、今更自分が大好きなアイドルの前でも抜け駆けされるのは中島としても許せない。何も考えずに、中島が加藤の方に突き進んだ。一方、加藤は何を気づいたように頭を上げて、目の前に立っている中島を見て、言った。「どうしてその靴を買うの？」中島が大声で加藤を問い詰めた。

「中島さんと関係ないでしょ？」加藤がこう答えた。「ないわけないでしょ？！山崎くんのプレゼントにするつもりなのに…」

　中島の独り言を聞いて、加藤が呆気に取られた。気がついたら、「もしかして、中島さんも山崎のファンですか？」と聞かれた。

「え？！」加藤の話を聞き、中島は驚きのあまり、思わず声を出してしまった。加藤が「も」という助詞を使ったということは、まるで自分が山崎くんのファンである事を認めたと同じだ。国民アイドルになりつつある山崎くんのファンに出会ってしまうのは、滅多なことではないし、同僚の中でも何人か知っているが、普段いつもクールなイメージを保ち、女性たちがイケメンの話題で盛り上がっている場面を涼しい目で見そうな加藤が、実はアイドルオタクだなんて、どうしても信じがたい。いや、今断定するのはまだは早すぎるかも。もうすこし様子を見ましょう。心に決めた中島は、慎重に口を開けた。「そうなんですけど、加藤さんも山崎くんの事を知っているなんて、意外ですね。」

「知ってるも何も、うちに住んでいるから。」

あまりにも意外な展開で、今回、中島は声を出すことさえできなくなり、自分の耳を疑わずにはいられなかった。一緒に住んでいるってことは、同居しているってことなの？もし本当なのであれば、とんでもないスキャンダルになってしまうに違いない。中島の頭の中に思わず妄想が膨らんでいた。彼女の表情から推測したかもしれないが、加藤が呆れたようにため息をついた。

「何を考えているかわからないが、そういう関係じゃないから。裕人は僕の弟なんだ。自分の住所がバレてしまって、パパラッチが見張ってるから、しばらくうちに隠しているだけ。」

なるほど。よくよく見ると、加藤の顔も何となく山崎くんと似ているし、女性の中でも結構人気がある。但し、その冷たい性格はいつも人に距離を感じさせるから、なかなか近寄れなかったのだ。

「いつから好きになった？」加藤が冷静に聞いた。「えっ、いつって、中学時代ごろかな。」「うわっ、長い！何が好きなの？」「もちろん全部！声とか顔とか歌っている時とても魅力的で、そして性格もいいし。さすが私の王子様！」山崎のことを話すと、いつの間に加藤への敵意を忘れていた。

「紹介してあげる？」「えええええっ？いいんですか？本当に？」意外すぎて敬語まで使い忘れた。「いいよ、チームに私だけ編集の功績について感謝されたのもすまないから」あの加藤がこんなことを言ってくれて、そんなに冷たくないかも？と思うと、「でも残業は毎週五時間にする。」「さすが加藤編集長、でも山崎のためな ら、なんだってできる！」

そうは言っても残業五時間って、やはり死にそう。でも山崎と会えるから、友達までなれるかもしれない、死ぬほど嬉しい。

ついに約束の日、金曜日に加藤と山崎の晩御飯の時間。仕事を終わった後、化粧と服をきっちりチェックして加藤と約束の店に向かった。「中島、今更だが」「なんですか。」「編集長として夢を守ってあげたいけど、少しだけ中島のことを大切に思っているから、先に言っておきたいことがある」「はい」「私の弟はそんなに女の子がみんな夢中になる人間ではない・」

「まぁ、アイドルと現実はいつも違ってるのがわかるから」「それよりもっとまずいけど、会ったらわかると思う」と言ってくれたが、私は山崎だったらどんな人であっても納得できる自信があった。何と言っても山崎は中学校時代からずっと私のアイドルだから。

やばい、全然納得できない。山崎は予想通り可愛くて、優しい王子様のような人だが、まさに男が好きだったんだ。少し泣きたい気分だった。これからも応援し続けると言ったが、加藤が言ってくれた「夢を守ってくれたいこと」はこんな衝撃的な事実だったとは早く知った方がよかったかもしれない。

加藤に感謝するか怒るか分からない が、私はこんな山崎でも応援したい。でも　もう夢の中でも結婚したくない。

謎に包まれた愛

Zhu Jiayue (ジュウ ジャユエ)*
Chen Xi (チェン シ)*
Xia Huaqing (シャア ワキョウ)*
Liu Zirui (リュウ ジルイ)*

*Names appear in Japanese convention; the family name appears first.

三年前、彼氏の嵐と共に東京大学医学部に入学したい私は夢を抱いて一生懸命努力し、遊ぶ時間も寝る時間もない、何も考えずに決めた人生の舞台に登った。あの時、誰も知らない自分が望んでいる将来を神様に頼って、毎週神社に祈っていた。ついに、三年後の今、神様が感動したかもしれない、私たちは夢の大学に行った。毎日すごく忙しかった。でも、嬉しかった。それままでいいと思ったとたん、眩しい光が目の前にぶつかり、意識を取り戻した時、全てが変わった。

目覚めた時、目に映ったのは真っ白な病院の壁と回診している医者だけだった。医者から聞いたのは、爆発の近くにいたのに、ただの擦り傷ですんだのはまるで奇跡だって。そうは言っても、左の目は少しはっきりと見えないようだ。えっ、ちょっと、爆発って？たしかに目が見えなくなるほどの光を見たけど、誰かが化学試験をしていると思った。だから左目がはっきり見えないんだろうか。後で何があったか、いくら考えても全く心当たりがない。ただ、あの人に会いたい。

何か分からないけど、すごく慌てている。嵐は大学に入るとすぐ化学のクラブに入ったんだから、その爆発に巻き込まれていないかしら。いや、お願いだから、あの人は絶対大丈夫と信じている。そう思っている間に、手が気づかないうちに電話をかけた。

嵐と始めてあったのは、高校の頃だった。ある週末、友達の愛子ちゃんと「N.ゴイデ」という店でケーキを食べながら女子の話をした。女子の話と言うと、やはり恋愛の話かしら。私たちのクラスに、「鈴木純一」という人がいる。あの人にとって、一番肝心なことはクラブのことしかない。あまりまじめに勉強しないし、毎日眠そうだし、青山学院高等部に入ったのにあの人は全く大学に行きたくないと思っている。
「でも、顔がいいし、生物部のリーダーだよ」と、愛子は何か、鈴木のことが気になっている。愛子は、鈴木についての話題を始めると、全然終われない。好きならなぜ告白しないか、「片思いが最高」と、愛子はそんな風に答えた。

ある日の夜だった、目が冴えてしまい、布団に入ってもまったく眠気がやってこない。早く寝ようと思えば思うほど、ナーバスになり、精神が高ぶってくる。そのまま何時間も悶々としていたところ、爰子が僕の部屋のドアの前で立ち止まった。 ……うなり声が漏れてしまったのだ。深夜の孤児院内、一瞬の静寂が流れる。すると愛子は、ドアの向こう側から優しく囁くように語りかけてきた。

「私は、貴方のなにものでもないし、親でもない、なにをしてあげることもできないけど、どうしても寂しくて、泣きたくで、我慢できなくなったときには、話し相手になるからね。大丈夫だから、私の事を家族だと思って話しかけてね」その瞬間、ぶわっ、と涙があふれ出た。

都心の繁華街が賑わいを見せはじめる午後 11 時頃。外界から遮断された僕の孤児院は、ひっそりと消灯時間を迎える。建物全体がしんと静まりかえり、聞こえてくるのは部屋に誰かの足音や小さな話し声だけだ。

私の人生、両親が居なくて寂しいと思ったり、友達の家族や親戚を見て羨ましいと思ったりしないよう、自分に言い聞かせていた。人生はそうゆうものだし、人生はそれだけ不公平なのだし、私はその恵まれない側なのだ。今の現状に満足した事は、なかった。常に頭にはどうしてこんなことになってしまったんだろう？このままわたしはどこ行くつもりなんだろう? そうやって考えていくと、僕が「ここ」から脱出するためには圧倒的な成果と大きな夢が必要だった。どんな凄い人間でも認めざるを得ない、最大級の結果が必要だった。彼の人生に対する憎しみが彼の目標を明確にさせた。何度も自分に言い聞かせた。他に選択肢はない。この夢を果たすには東大に合格するしかないのだ。それは、失われた幸せを取り戻すための挑戦でもあった。

爆発により副作用が発生したせいで、私は入院して 3 ヶ月間リハビリテーションを受けなければならなくなってしまった。

　その日の夜、いつものように付き合ってくれなくて嵐は研究室へ手伝いにいった。彼が残してくれたノートを見ながら、欠席した授業を自習しようとするが、ちょっとだけ読んだら眠気が襲ってきた。ぼんやりしていると、耳元で「野田春、これは全部貴方のせいです、あなたがいなければ.... あなたがいなければ.彼は私のことしか見ない！！！！」と低い男性の声が響いた。だれかを知りたくて目覚めようとすると、部屋には誰もいなかった。

ただの夢かなあ？

嵐が戻ってきた後、さっきのことを彼に話してそれで冗談で「もしかして私が暴力団の恨みを買ったのかな。爆発で私を殺すなんて化学の天才の私のことを舐めすぎている。」と言った。話が終わった瞬間、嵐の顔色が急によくなくなった。彼は私の手を握り、片手は私の肩を抱いて、非常に真面目に言った。

「私は秘密を見つけた、私には弟がいる。」

　これから何かが発生するかを分からない私が気楽に答えた「ええ、本当ですか？ 孤児院から電話があったの？」

「いや」彼の眉毛はつりあがり、目つきが鋭くなった。「鈴木純一、愛子のボーイフレンドは私の弟かもしれない。」

　「ええ？純一君？どうしてそう思うの？鈴木という名前だけで自分の弟だと思うことはあり得ないでしょう。」

「最初私もそう思ったが、研究室の隅に彼の筆跡で書かれた配合リストを見つけた。その配合リストは、爆発物しか作れない。彼が書いたかどうか確認しようとする前に、事故が発生した。病院の部屋番号は愛子しか知らなかったんだ。もちろん、それは偶然かもしれない。
ちょっと前、彼は私を誘って、喫茶店で彼は実際、愛子のことが好きではなくて、ただ彼女に近づいたのは、彼の心の中の人を思い出せるからだと言った。この世の中にはこんな偶然ってある？」

「……でも、いつも彼は良い人でそんなことをするわけがないでしょう？どうするつもり？ 」私は少し怖くなってきた。「このことはそれほど単純ではないかもしれない。愛子と話すか？それとも警察を呼ぶか？彼は貴方の弟だと言ったが、それならなぜ私を殺そうとするの？」

「ちょっと話が長くなるから、後でゆっくり話そう。とりあえず今のままにしよう、部屋にはまずいくつかのカメラを設置する。」

ついに私たちは部屋の中に隠しカメラを設置し、次に何が起きるかをじっと待っていた。やはり 3 日後、平穏だった日が再び崩れた。私と嵐が病院で防犯カメラの映像を見ていた時、その映像で嵐が私の部屋を離れた後、誰かがこっそり中に入って何か探していたらしいものを見た。窓の外のかすかな明かりに照らされて、私の部屋に入ってくる人の顔が見えた。それは鈴木純一だった。前に嵐から純一に対する疑いを聞いたことがあったので、私は映像を見て怪訝に思ったことは特になかった。

純一はどうして私の部屋に入って、何を探してたのか？彼が私を傷つけた目的は何か？嵐と相談した結果、愛子と純一が病院に来ることになっていた。もちろん私たちは隣の病室で警察を待たせていた。純一が何を目的としていたとしても、このまま続けるわけにはいかない。

純一と愛子は私の病室に来て、最初は何もなかったかのように見せかけていたが、その直後に嵐が防犯カメラの映像を目の前で見せると、純一の顔色が変わり、愛子も驚いた。純一は、恐ろしい目で私を見ていた。「あなたがいなかったら、ずっと前に嵐が俺は弟だと気づいたはずだ。あなたさえいなければ、嫌いな女性と一緒にいる必要はなかった。長年私がどんなにつらい思いをしてきたか知っていたか。私の人生はどれだけ暗かったか？あなたがこの世にいなければ、全てのことは起こらなかった。全部、お前のせいだ!」純一は明らかに気が狂ったようになり、警察に連れて行かれた。愛子は驚きすぎて気を失ってしまって、病院に運ばれ、しばらくして目を覚ました。すべてのことが明らかになって、嵐が私の手を強く握っていた。これから、嵐を私から奪う人は誰もいない。